福岡市埋蔵文化財調査報告書第960集

福　岡　城　跡

── 第53次調査報告 ──

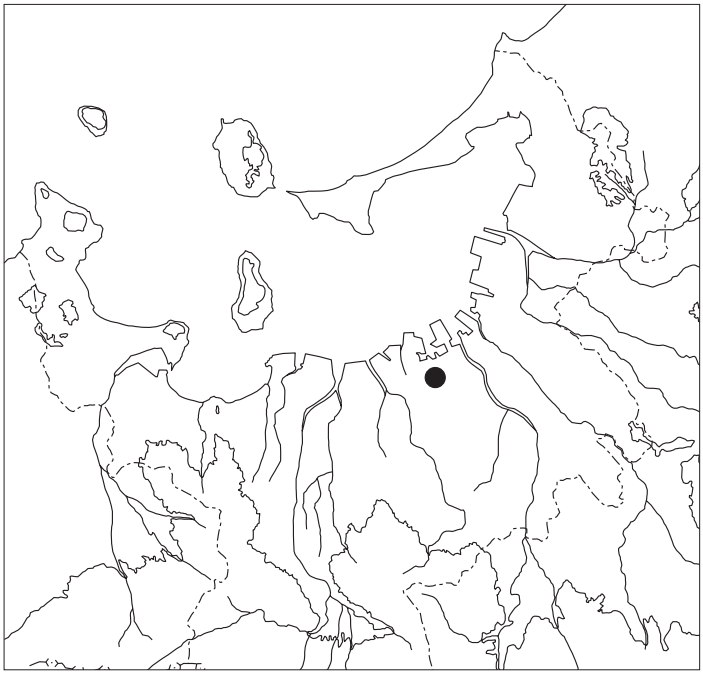
２００７

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第960集

福　岡　城　跡

── 第53次調査報告 ──



調査番号　0503
遺跡略号　FUE-53

２００７

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には豊かな自然と多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護・活用に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。本市ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は中央区赤坂一丁目地内における福岡城跡第53次調査の成果を報告するものです。この調査により、福岡城の中堀外側に位置していた石垣を確認することができ、この地域での新たな資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてご活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのご協力を頂いた、独立行政法人都市再生機構の皆様をはじめ関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　植　木　とみ子

例　　言

1．本書は共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成17年４月４日から平成17年５月18日にかけて行った福岡城跡第53次調査の調査報告書である。

2．本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の整図は大塚紀宜が行った。

3．本書で用いた座標は世界測地系に基づく。また本書の挿図内で用いた方位は磁北で、真北から６°21′西偏する。

4．本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

5．本書の執筆は、第４章を除いて大塚が担当した。「付篇　福岡城内堀石垣の石材分析」については唐木田芳文氏（西南学院大学名誉教授）より玉稿を頂いた。

6．本書に掲載した福岡城に関する近世古地図・絵図は全て福岡市博物館蔵である。

7．本書の執筆に当たり、以下の方々より有益な助言・協力を頂いた。

〔福岡城古絵図〕宮野弘樹（福岡市博物館学芸課）
高山英朗（福岡市博物館学芸課）
〔近代遺物〕　野口文（福岡市博物館学芸課）
太田暁子（福岡市博物館学芸課）

8．本書の編集は大塚が行った。

遺跡調査番号	0503		遺跡略号	FUE －53	
地番	中央区赤坂１丁目55番		分布地図記号	舞鶴　60	
開発面積	653.71㎡	調査対象面積	156.0㎡	調査面積	156.0㎡
調査期間	2005（平成17）年４月４日～５月20日				

目　　次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経緯……1
　２．調査組織……1
第２章　歴史的環境とこれまでの調査結果……2
第３章　調査の報告……4
第４章　小結……10
付篇　福岡城内堀石垣の石材　唐木田芳文……21

挿図目次

Fig. 1　調査地点位置図（１/1,000）……5
Fig. 2　調査区配置図（１/200）……7
Fig. 3　石垣平面図・立面図１（１/50）……8
Fig. 4　石垣平面図・立面図２（１/50）……9
Fig. 5　石垣断面図・土層断面図（１/50）……10
Fig. 6　明治時代の福岡城周辺地形図（１/25,000）……18
Fig. 7　現在の福岡城周辺地形図（１/25,000）……19

図版目次

図版１　石垣全体（西から）……11
図版２　調査区全景（西から）……12
図版３　石垣正面１（南西から）……12
図版４　石垣正面２（南から）……12
図版５　石垣正面３（北西から）……13
図版６　石垣側面（北から）……13
図版７　調査区南壁土層断面（北から）……13
図版８　堀内部出土遺物……14

表 目 次

Tab. 1　福岡城跡調査一覧……3

※掲載絵図一覧

（１）福博惣絵図（福岡市博物館所蔵　黒田家資料129）……15
（２）福岡城古図（福岡市博物館所蔵　藤井家資料527）……16
（３）筑前国福岡城周辺絵図（福岡市博物館所蔵　平成13年度博物館購入資料）……16
（４）御本丸惣図（福岡市博物館所蔵　鶴久二郎資料２）……17

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

2004年（平成16年）10月25日付けで、独立行政法人都市再生機構九州支社より福岡市中央区赤坂一丁目55番地内における埋蔵文化財の事前審査についての依頼が提出された。この依頼に先だって埋蔵文化財課では前年度の平成16年１月６日に福岡市財政局財務部公有財産課よりこの土地の一部に対する市有地売却に伴う埋蔵文化財の事前調査の依頼を受け、対象地が周知の遺跡である福岡城跡の範囲内に位置し、内堀石垣の推定線が敷地内に位置する可能性が高いことから、同年２月18日に試掘調査を実施した。その結果、東側の敷地境界付近で石垣の腰石を検出し、現地に石垣の一部が遺存していることを確認していた。この結果をもとに埋蔵文化財課では関係機関と協議を重ねた結果、石垣が遺存すると推定される敷地東側の範囲について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成17年４月から５月にかけて調査を実施した。

調査は４月４日より重機による表土除去を開始し、４月６日より人力による掘り下げ、石垣露出作業を実施し、写真撮影、測量を行いながら調査を進め、５月18日に調査区を埋め戻し、終了した。調査にあたっては、現地が同年３月20日の福岡西方沖地震により多大な被害を受けた地区であることを考慮して周辺への影響を最小限にすることを第一とする方針で調査を進めた。その甲斐あって、調査中の４月20日早朝の震度５弱の余震に対しても調査区内外を含め発掘調査による影響は全くなく、無事に調査を遂行することができた。

発掘調査の実施にあたっては、独立行政法人都市再生機構九州支社をはじめ関係者の方々に多大なご理解とご協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

２．発掘調査の組織

事業主体　独立行政法人都市再生機構九州支社
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第１課）課長　山口譲治
庶務担当　文化財整備課（現文化財管理課）　鈴木由喜
事前審査　埋蔵文化財課事前審査係　田上勇一郎　井上繭子
調査担当　埋蔵文化財課調査第２係　大塚紀宜
調査作業　濱地静子　石川洋子　柴田博　伊藤美伸　田中トミ子　北條こず江　水野由美子
　　鍋山治子　播磨千恵子　桑原美津子　吹春憲治　林厚子　乾俊夫
整理作業　篠原明美　古城恭子

なお、調査中に、唐木田芳文氏（西南学院大学名誉教授）、梅崎惠司（財団法人北九州市芸術文化振興財団）の両氏には現地で有益な序言を頂きました。記して感謝いたします。

第２章　歴史的環境とこれまでの調査結果

１．福岡城の築城と堀の開削

1600年、黒田長政が豊前・中津から筑前名島に入城する。しかし長政は間もなく名島城が城下町を形成するには地形的に不都合であることを悟り、当時福崎と呼ばれていた丘陵地に築城を決める。城縄張りに当たっては、丘陵中腹に残っていた古代の造成による平坦地などもそれと気付かずに利用されたことであろう。築城工事は1601年より開始され、７年で城を完成させたといわれているが、『黒田家譜』によると、「一両年」で城本体を仕上げたとある。これはものすごい突貫工事であり、今回の調査結果にもその様相が伺われる。この築城の際に、名島城の石垣や櫓を悉く福岡城の築城に使用するために持ち出したとされていたが、近年の名島城の発掘調査では当時の部材がいくらか遺存していることが判明し始めている。この間に福岡城本城の他にも領内の六端城を築城し、領内の防衛を強化している。

城郭本体の防御施設として、西側には自然の地形を利用して大濠を備え、北・東・南側には内堀を開削して城郭全周を堀で区画した。福岡城の城郭は内堀で囲まれた部分に限られず、現在の那珂川を東の惣構、室見川を西の惣構として防衛線を張っている。また那珂川から福岡城内堀をつなぐ堀として中堀と肥前堀を開削しているが、この肥前堀の両岸に石垣を築くことを幕府に伺った文化８（1811）年の記録が残っており、それ以前は肥前堀の両岸には石垣がなかったことが推定される。この際に築かれたとみられる石垣は平成７年度に行われた調査で確認されている。（『福岡城跡－福岡城中堀跡の調査－』1997）

２．これまでの調査結果

以下は今回の調査に直接関連する内堀・肥前堀の調査に限ってこれまでの結果を振り返る。内堀の調査の嚆矢は昭和51～52年にかけて実施された地下鉄１号線荒戸地区工事に伴う第２次調査である。この調査で内堀北側の石垣が良好な状況で出土し、現在も保存され公開展示されている。（『福岡城址－内堀外壁石積の調査－』1983）また第５次調査では東側内堀外側の石垣を確認している。23次では内堀南側の追廻門西側の堀部分の調査で内堀内側の近代の石垣を検出している。（『福岡城跡－第23次調査報告－』1995）第26次調査では赤坂門に伴う石垣が良好な状態で出土し、内堀と中堀の接合地点の位置関係が明らかになった。（『福岡城赤坂門跡－福岡城跡第26次調査報告－』1996）内堀の調査はこれまでで以上の４次にわたって行われているが、調査地点は内堀北側から東側にかけての範囲が主で、内堀南東側部分では調査実績がなく、遺構の実態は不明である。

肥前堀部分では、第８次・12次・14調査で渡辺通り沿いから福岡市役所庁舎にかけての部分で肥前堀の北側法面と杭列が検出されている。（『福岡城肥前堀　市庁舎建設に伴う埋蔵文化財の調査』1986）32次調査では中堀南岸の調査で、肥前堀の一連の調査で初めて石積みを確認した。（『福岡城跡－福岡城中堀跡の調査－』1997）36次調査で肥前堀南側の石垣を、37次調査で北側の石垣を検出している。（『福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11』1998）37次調査区の東隣の46次調査では肥前堀北側の入隅部分を検出している。肥前堀のこれまでの調査によって石垣、杭列などが検出され、一部を除いて堀の範囲や規模を推定することが可能となっている。

Tab. 1　福岡城跡調査一覧

次数	調査年度	調査地区	調査面積（㎡）	調査原因	報告書・文献名	報告書番号	刊行年
A	1951	三の丸中央部		テニスコート建設		―	―
B	1959			国立病院建設		―	―
1次	1963	三の丸東郭	596	裁判所建設	史跡福岡城発掘調査概報		1964
2次	1977	北側内堀外壁	14,900	地下鉄工事	福岡城址－内堀外壁石積の調査－	101	1983
3次	1978	薬院新川	500	地下鉄工事	福岡城址－内堀外壁石積の調査－	101	1983
4次	1979	御鷹屋敷跡	2,200	公園建設	筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷	59	1980
5次	1981	赤坂門北側内堀	70	ビル建設	福岡城址－内堀外壁石積の調査－	101	1983
6次	1983	記念櫓跡	36	史跡整備			
7次	1984	肥前堀(旧県庁跡地)	580	公園建設			
8次	1985	肥前堀	150	市庁舎建設	福岡城肥前堀	131	1986
9次	1987	鴻臚館	650	球場改修	鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報	270	1991
10次	1988	鴻臚館	856	確認調査	鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報	270	1991
11次	1988	西～南縁土塁	500	史跡整備	福岡城跡Ⅳ－内堀内壁の調査－	237	1991
12次	1988	肥前堀	650	商業ビル	福岡城肥前堀第３次調査報告	293	1992
13次	1989	鴻臚館	1,200	確認調査	鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報	270	1991
14次	1989	肥前堀	700	駐車場建設	福岡城肥前堀第４次調査報告	294	1992
15次	1990	鴻臚館	1,300	確認調査	鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報	270	1991
16次	1990	月見櫓跡	190	確認調査	福岡城　月見櫓	316	1992
17次	1991	鴻臚館	1,000	確認調査	鴻臚館跡Ⅱ	315	1992
18次	1991	時櫓跡	250	確認調査	福岡城跡－潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告－	970	2007
19次	1992	鴻臚館	1,670	確認調査	鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告	372	1994
20次	1992	鴻臚館	430	確認調査	鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告	372	1994
21次	1992	花見櫓跡	200	確認調査			
22次	1993	鴻臚館	450	確認調査	鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概要報告	416	1995
23次	1993	追廻門南側堀	220.3	確認調査	福岡城跡－第23次調査報告－	415	1995
24次	1993	本丸西端	80	トイレ改築			
25次	1993	潮見櫓跡	65	確認調査	福岡城跡－潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告－	970	2007
26次	1994	赤坂門石垣	430	変電所建設	福岡城赤坂門跡－福岡城跡第26次調査報告－	463	1996
27次	1994	鴻臚館	50	史跡整備	鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告	486	1996
28次	1994	鴻臚館	850	確認調査	鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告	486	1996
29次	1994	三の丸家老屋敷地	1,024	裁判所建替	史跡福岡城跡－東の丸の発掘調査－	546	1997
30次	1994	三の丸南側土塁	60	確認調査	鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告	486	1996
31次	1995	鴻臚館	300	確認調査	鴻臚館跡８　平成７・８年度発掘調査概要報告	545	1997
32次	1995	中堀	154	共同住宅建設	福岡城跡－福岡城中堀跡の調査－	498	1997
33次	1995	三の丸北西郭土塁	500	公園整備			
34次	1996	三の丸南西郭土塁	32	駐車場整備			
35次	1996	鴻臚館	450	確認調査	鴻臚館跡８　平成７・８年度発掘調査概要報告	545	1997
36次	1996	肥前堀	46	共同ビル	福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11	―	1998
37次	1996	赤坂門外壁	10	事務所建築	福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11	―	1998
38次	1996	潮見櫓跡	463	史跡整備	福岡城跡－潮見櫓・時櫓整備に伴う確認調査報告－	970	2007
39次	1997	鴻臚館	200	確認調査	鴻臚館跡９　平成９年度発掘調査概要報告	586	1998
40次	1997	追廻門	180	確認調査			
41次	1998	鴻臚館	230	公園整備	鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告	620	1999
42次	1998	鴻臚館	930	試掘調査	鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告	620	1999
43次	1999	鴻臚館	3,038	史跡整備	鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査概要報告	695	2001
44次	2000	鴻臚館	2,000	確認調査	鴻臚館跡12　平成11・12年度発掘調査概要報告	733	2002
45次	2000	警固土塁	110	公園整備			
46次	2000	肥前堀	166	ビル・駐車場		755	
47次	2001	鴻臚館	2,000	確認調査	鴻臚館跡13　平成13年度発掘調査概要報告	745	2003
48次	2001	下の橋・上の橋	519.56	確認調査	福岡城大手門－第48次調査報告－	772	2003
49次	2002	鴻臚館	1,200	確認調査	鴻臚館跡14	783	2004
					鴻臚館跡15　平成14年度発掘調査概要報告	838	2005
50次	2003	鴻臚館	2,425	史跡整備	鴻臚館跡16　平成15年度発掘調査概要報告	875	2006
51次	2004	鴻臚館		史跡整備			
52次	2005	鴻臚館		史跡整備			
53次	**2005**	**東側内堀**	**156**	**共同住宅**	**福岡城跡－第53次調査報告－**	**960**	**2007**

第３章　調査の報告

（１）調査概要

今回調査した地点は内堀東側の外側肩部にあたる地点である。城の東側の南北方向の堀の外側で、赤坂門（第26次調査地点）より150m 南側の地点である。この敷地は以前市長公舎が建っていた土地である。

調査地点は敷地面積653.71㎡の長方形の敷地内で、石垣部分とその前面２ m 幅の帯状の区画を調査範囲に設定して調査を行った。そのほかの敷地の部分は堀の内部で特別な構築物は存在しないと想定し、調査対象からは外している。また、検出した石垣が隣接する道路に非常に近い位置にあったが、道路に影響を与えないために道路際の部分は掘削を避けており、そのため石積み裏込め部分については十分な掘り下げを行って観察することが不可能であった。折しも調査開始２週間前の３月20日に福岡西方沖地震が発生し、警固断層推定線直上であった今回の現場付近は市内でも多大な被害が生じた地区の１つで、余震の心配もあり、地盤崩落に関する安全面に対して最大限の配慮を持って調査を実施せざるを得なかった事情もある。

（２）検出遺構

法量　検出した石垣の部分は下端長20.8m、上端22.2m で、高さは遺存状況が良好な南側部分で2.0m、腰石しか遺存しない北側で80cm 前後である。石垣前面から奥は1.2m 前後の幅まで掘削し、上面の状況を観察している。

石垣の遺存状態は、北側で腰石から１～２段程遺存し、南側では基底面から1.5～1.7mの高さで遺存していて、南側部分については石垣本来の形状を残しているものと考えられる。

石材　前面に使用された石材は大きさが縦30～40cm でほぼ揃えられ、横は大きなもので１ m 前後をはかり、60～80cm のものが多い。石垣上部と下部では石材の大きさにほとんど違いはなく、南側部分では最下層の石材は上層よりもやや小型の石材を使用しており、北側部分では逆に大型の石材を腰石として据えている。石材の形状は直方体に近い形に粗割りされた石材が多く、加工の必要のない手頃な大きさの丸石などはそのまま使用されている。鏨痕などの整形を行った痕跡をもつ石はみられず、荒割りした石材をそのまま野面積みしたとみられる。

裏込めに使用されている石材は大きさが10～20cm の礫石を主としており、ほとんどが角礫状を呈し、円礫はほとんど使用されていない。裏込め石は石垣前面の石の裏に密に詰められており、裏込め石の間に粘土を詰めてより強固にしている。

城内や赤坂門の石垣に使用されている石の中には記号を刻んだ石材が確認されているが、今回調査した部分では刻印をもつ石は発見されていない。また、明らかに墓石と分かるような文字を刻んだ石も検出されていない。

積み方　調査区内では、石垣は道路に沿ってほぼ一直線に延びている。北側部分では腰石しか遺存せず、石垣上部の構造は不明だが、腰石の上面レベルがほぼ水平で揃っており、一段ずつレベルを整えてから上段の石を積んでいったと推定される。

南側部分では上段まで石が遺存していて状況を詳しく把握できる。この部分では基盤層の上にまずやや小型の石材を置いて基礎石とし、その上にやや小型の石材を置いていて２段目の石の上面レベルは北側部分の腰石の上面レベルとほぼ一致する。その上に段を揃えながら３段分の石を積み上げ、最上面に薄めの板石を置いて天端レベルを水平に整えている。最上面から基盤面まで、６段の石を積み上げていることになる。なお調査区南端部分は上から４段目ぐらいまでＶ字に石の積み方が乱れて

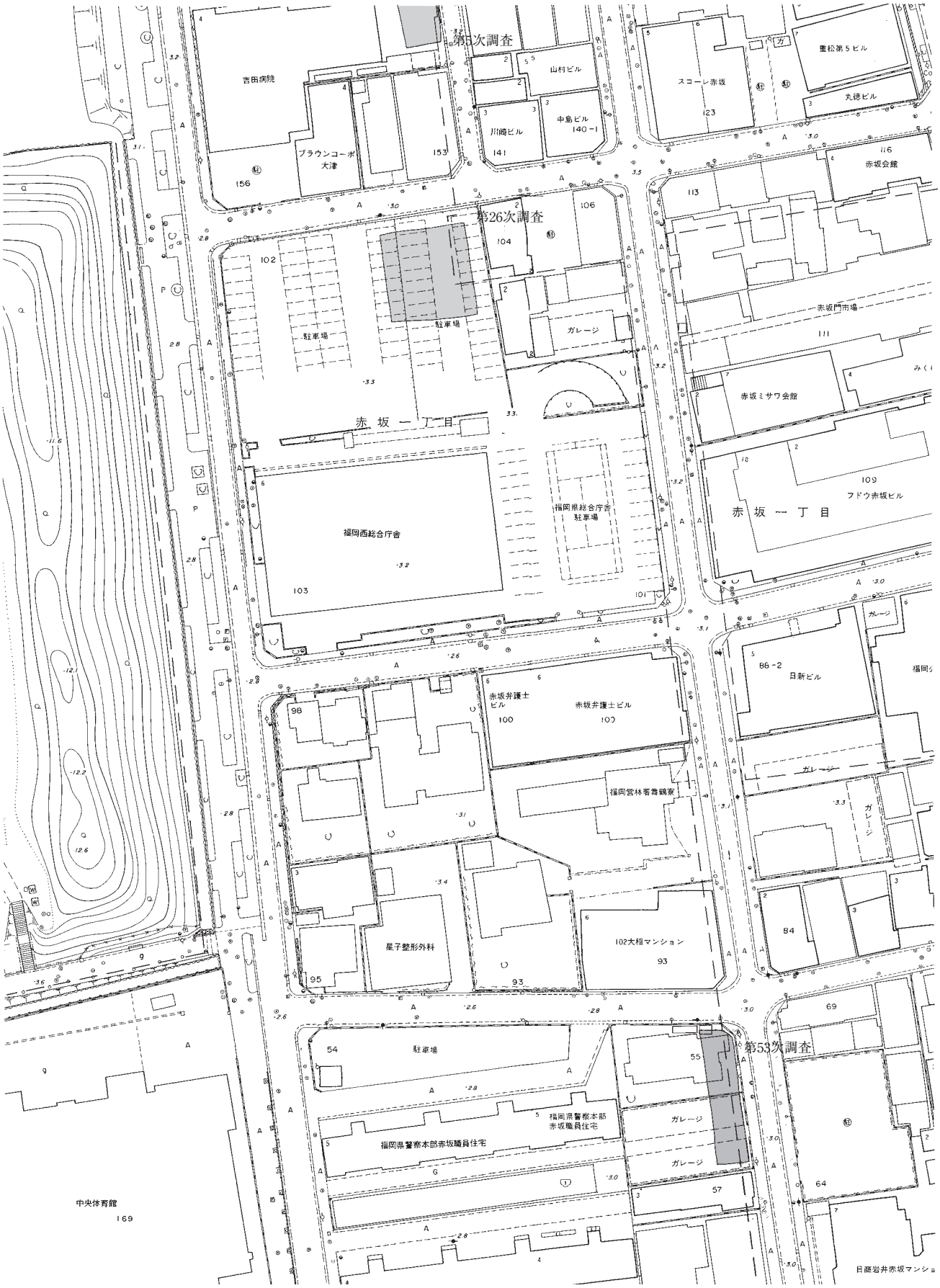


Fig. 1　調査地点位置図（1 /1,000）

いる部分があり、この部分は後世の補修による積み直しと考えられる。

前面の石と石の間に10cm 前後の石を間詰め石として嵌めている箇所も見られるが、本来は石と石の間のかなりの部分に石垣の表面の見かけを整えるための間詰め石が嵌っていたと考えられ、年月の経過と共に落下したものと推定される。これらの間詰め石には荷重がかかっていないために手で簡単に引き抜ける状態で、石垣前面に積まれている石材の加重は石材のやや後方にかかっている。

裏込め石　裏込め石が石垣前面からどのくらいの幅まで詰められているかということについては、隣接する道路との間に十分な調査範囲が確保できなかったため、確認できなかった。赤坂門の調査では石垣上面部分で幅約2.5m の幅まで裏込め石が確認されている。その幅を今回の調査地点に適用すると、裏込め幅は道路部分まで広がることが予想される。東側すぐ際を道路が走っている今回の調査では裏込め石の裏にあるはずの埋め立て造成土も確認できていない。

石垣基礎工事　基盤層と腰石の間には胴木や梯木などの基礎工事の際に設置される木材は検出されておらず、腰石は基底層の青灰色粗砂層に直接設置されている。調査終了直前に北側部分を一部断ち割り、腰石の下の状況を確認したが、基礎工事の痕跡は見つからなかった。周辺調査では26次の赤坂門調査では胴木が検出されず、46次の肥前堀部分では胴木が検出されている。

堀内部堆積土層　堀の基底部は礫混じりの灰色粗砂層で河川起源とみられる川砂である。堀底部、壁面からは常時水が湧いており、舐めて見たところ塩気はなく、真水とみられる。堀覆土下部は黒色粘質土が堆積しており、近代の遺物が混入していることから、明治以降に堆積したものと考えられる。堀覆土上部は青灰色粘土と砂層の互層をなしており、流れのある状態で自然堆積したことを物語る。覆土最上層は埋め立て造成時の客土である。

（３）出土遺物（図版８）

石垣西側の堀内部部分は中層以上を重機で除去したため、出土した遺物は全て下層の黒色粘質土からのものである。検出した遺物の大半は瓦類で、その他の出土遺物は染付やガラス瓶、陶器が主体である。ほとんどが近代～現代の遺物である。

１は染付の碗で、口径9.5cm、器高4.5cm。外面に「博多掛町」と書かれる。２は染付の皿で口径11.0cm、器高2.9cm。内面見込みに手書きで蜻蛉を描き、裏面には「ジョーキュウ醤油」の屋号が印判される。

保水性の高い堀の中からは木質の遺物も多数出土している。３は鞠の芯とみられる木製の玉。４はコマで鉄芯がまだ残っている。

５～８はガラス瓶。５はワイン瓶とみられ、高25.2cm。下部は六角柱で、全体に緑色を呈する。６は高さ14.5cm の透明の瓶で底部は上げ底を呈する。７は高16.9cm の緑色の瓶で、上から見ると楕円形で側面には型成形時の金型の合わせ目がみられる。片面には「みかん水」、もう片面には「登録商標　七星」と書かれている。８は薬瓶と見られ、全体に茶色で、ゴム製の蓋が残り、内部に液体が入った状態で密封されている。開封してないため、内部の液体は未判明。

９は陶製の人形で、博多遺跡群の近世の遺構からよく出土するものと同一である。10は印鑑。滑石製で側面に切り込みがある。文字か記号のようなものが彫られているが、解読できない。11は天保通寶、12は一銭銅貨で明治16年の銘がある。13は半銭銅貨で、明治６年の銘がある。

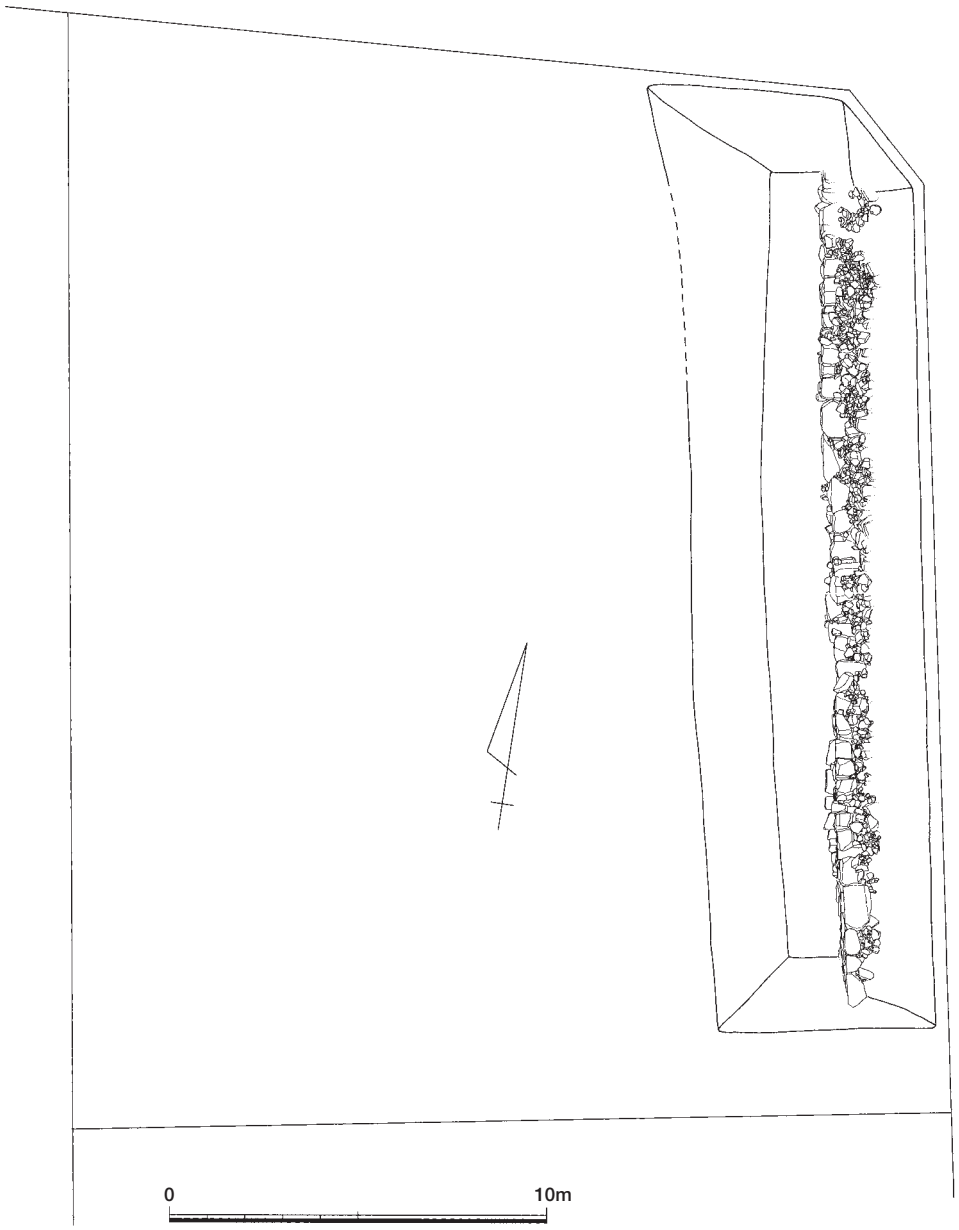


Fig. 2　調査区配置図（1 /200）

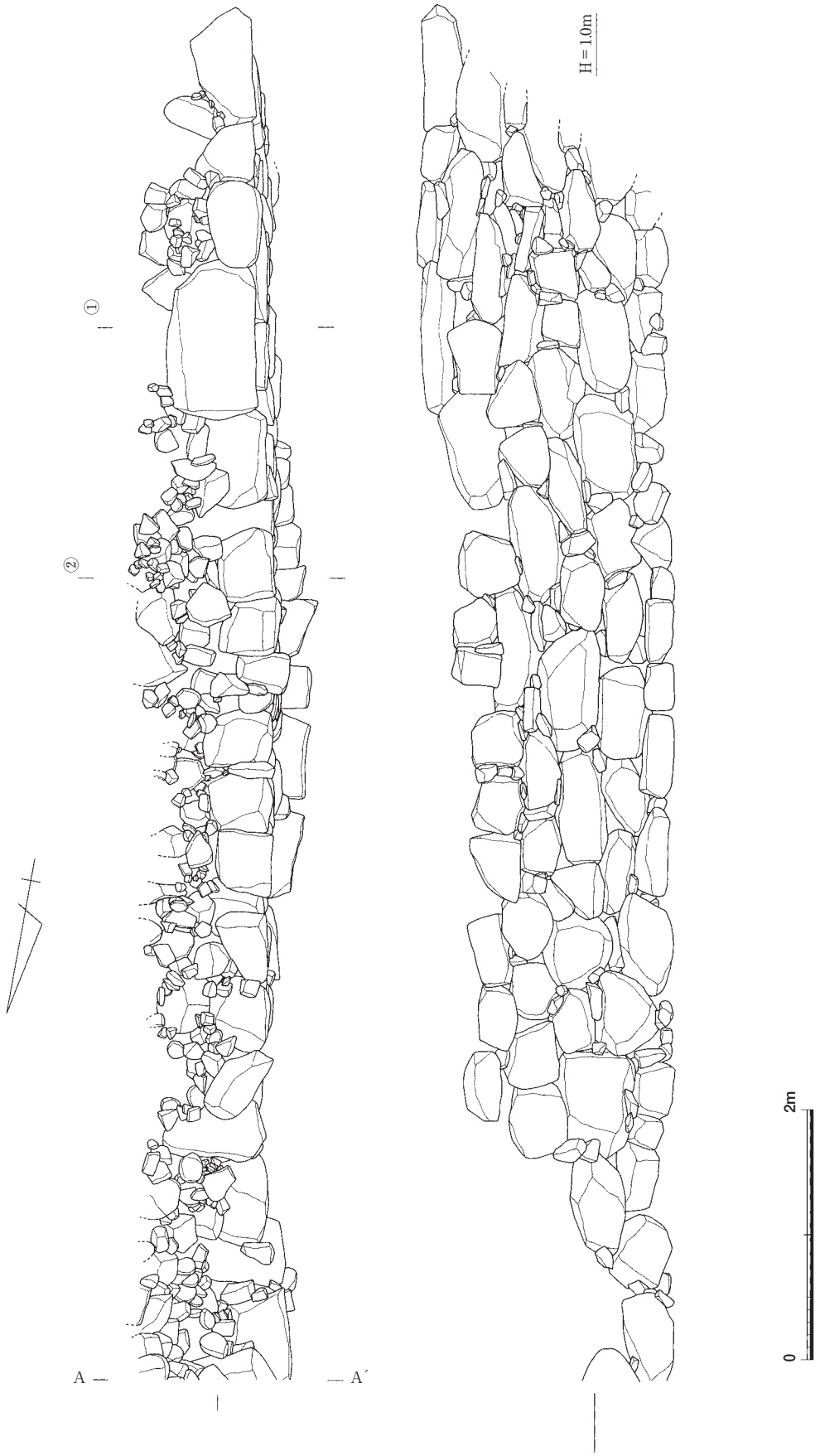


Fig. 3　石垣平面図・立面図１（１/50）

Fig. 4　石垣平面図・立面図 2 （1 /50）

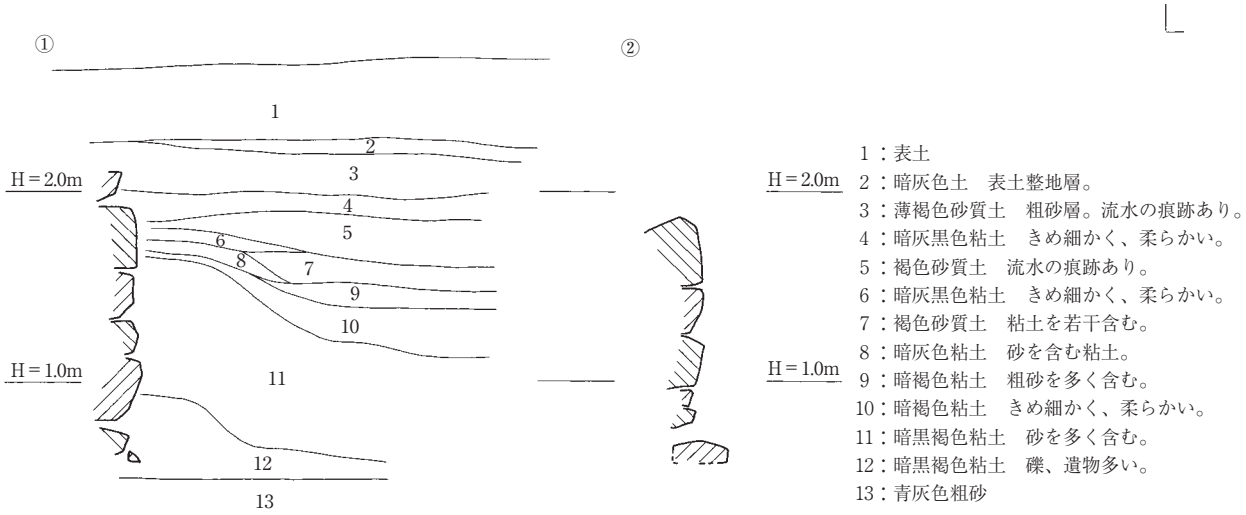


Fig. 5　石垣断面図・土層断面図（1 /50）

第4章　小　　結

今回の調査結果を裏付けるものとして、福岡城に関する古絵図資料を紹介し、さらに堀の埋没過程についても考察を加える。

古地図からみた福岡城内堀の変遷

今回掲載している福岡城の古図面は、福岡市博物館が所蔵するもので、これまで紹介されたことがない資料を中心に選択した。年代は江戸時代中期の元禄年間から江戸時代後期の元治年間のものまで幅広い。以下、資料の紹介と描かれている内堀を中心とした堀・石垣の状況を概観する。

（1）福博惣絵図（元禄12（1699）年作成　明和6（1769）年写　黒田資料129）（p. 15）

元禄の国絵図を元に作成されたものと推定される。城郭の外郭線が現在の測量図とほぼ一致しており、細部の描写も細かいことから、正確な測量作業を行った原本を使用したと考えられ、内堀や肥前堀の位置や規模、道路位置もほぼ正確なものと推定される。城郭線内側の記載はない。なお元禄城絵図の写しである福岡市博物館所蔵の「御城内絵図」（黒田家資料204）と城・堀の輪郭線が一致し、本丸天守台南西角を中心として十二方に延びる放射状の直線も一致する。

堀に面した法面を堀の各地点で確認すると、内堀北側部分では、堀の外側の法面はほぼ前面石垣積みが描かれている。今回の調査地点付近となる内堀東側部分も堀の外側は堀北側から続く石垣が描かれている。内堀南側部分は東側から堀沿いに延びる道路際まで石垣が続いていることが確認できるが、その西側では石垣は描かれておらず、搦手門付近で石垣がみられる他は恐らく法面を土で固めた土坡であったと見られる。

また肥前堀については、赤坂門よりも東側に石垣の表現は描かれていない。おそらく石垣は赤坂門周辺までで止まり、東側は薬院門以外の部分は土坡で築かれていたとみられる。

（2）福岡城古図（江戸時代作成　藤井家資料527）（p. 16上）

江戸時代に作成されたものと見られるが、作成年などは不詳。原図には福岡城及び堀周辺以外の描写はない。前述の（1）と比較して、城郭北側が直線的に延び東西側の城郭線が機械的に垂直方向に引かれるなど測量としての正確さには若干欠けるものの、堀の表現などは詳細に描かれている。（1）

図版１　石垣全体（西から）

図版 2　調査区全景（西から）

図版 3　石垣正面 1（南西から）

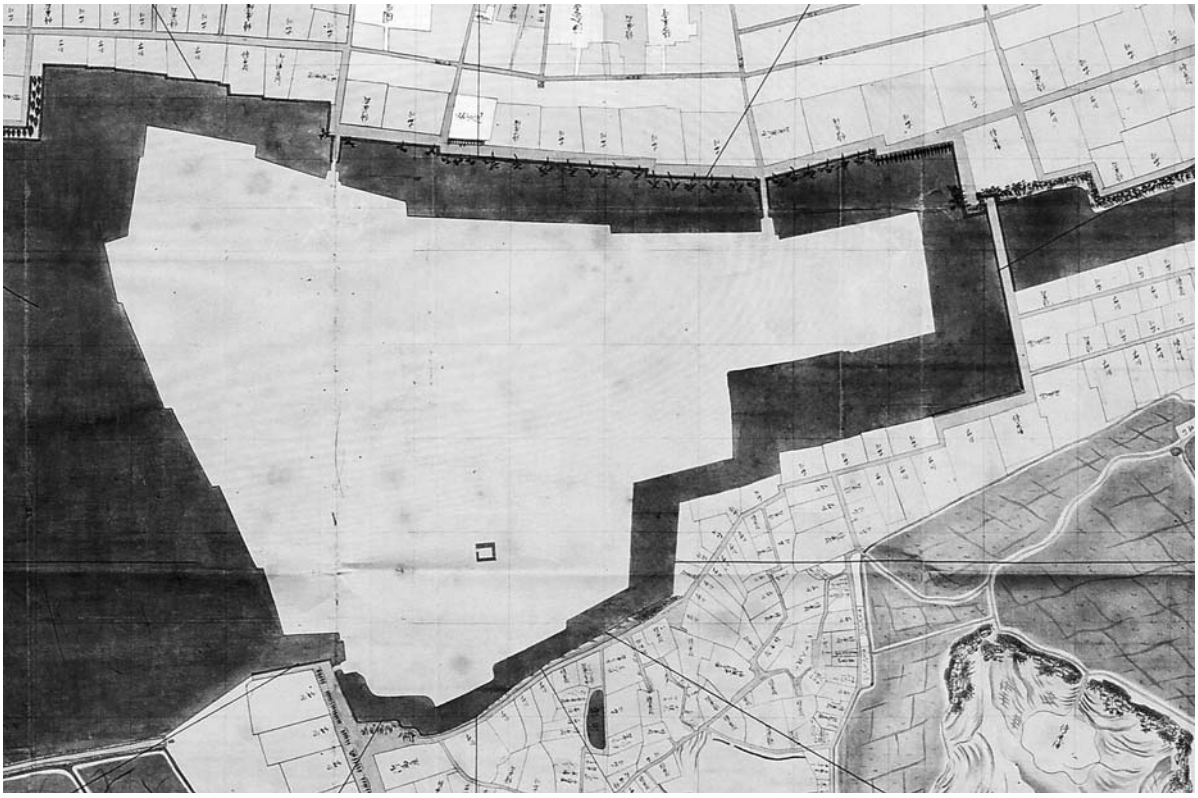
図版 4　石垣正面 2（南から）

図版 5　石垣正面 3（北西から）

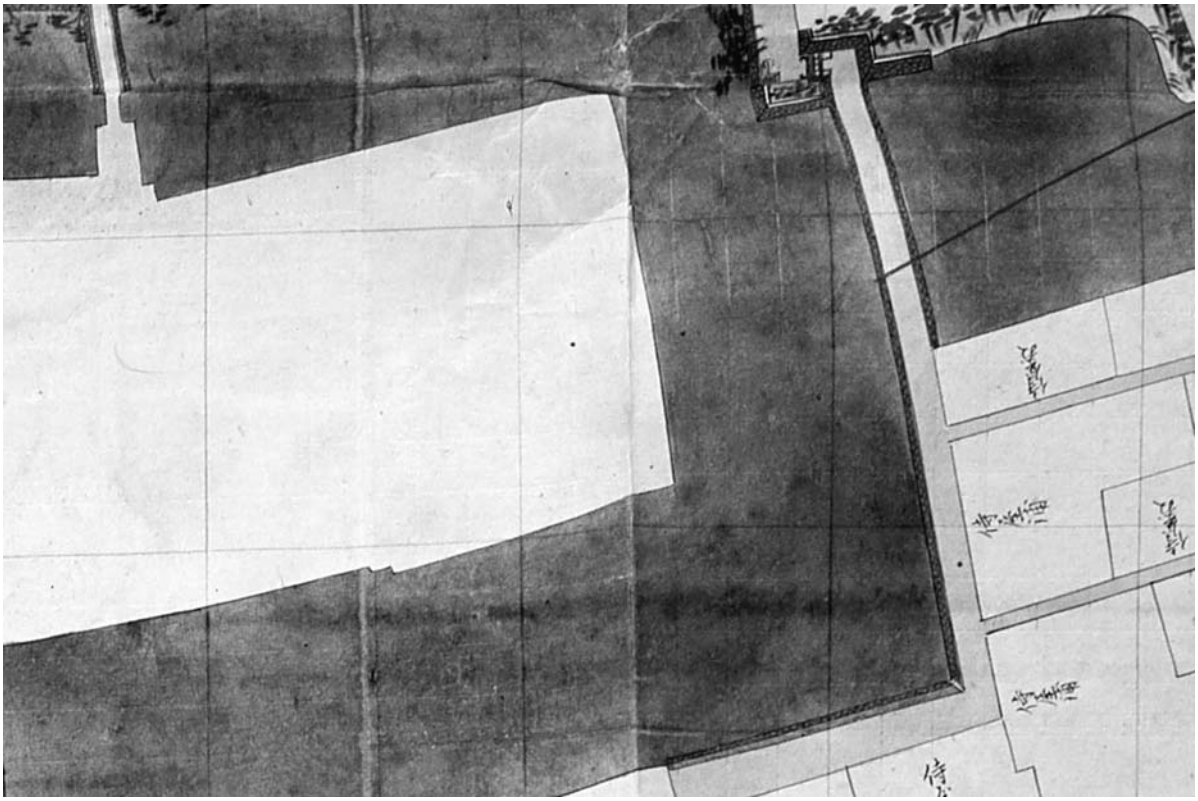
図版 6　石垣側面（北から）

図版 7　調査区南壁土層断面（北から）

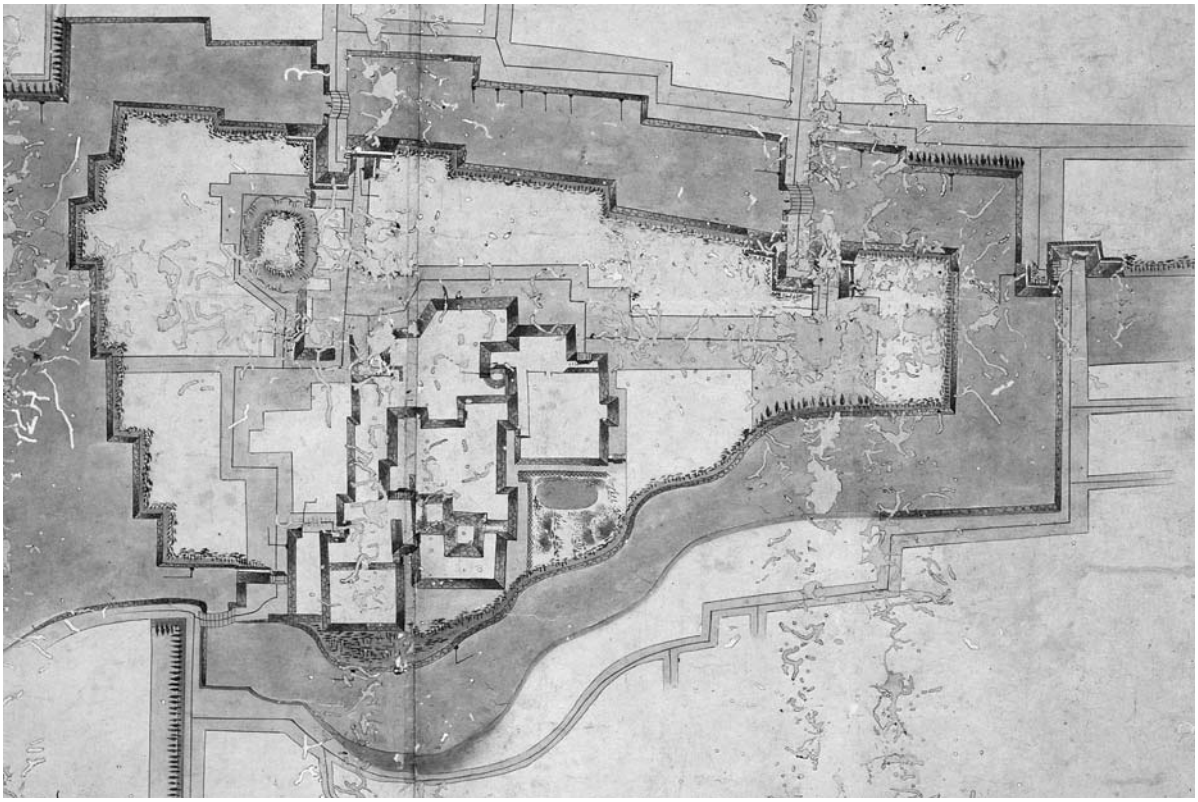
図版８　堀内部出土遺物



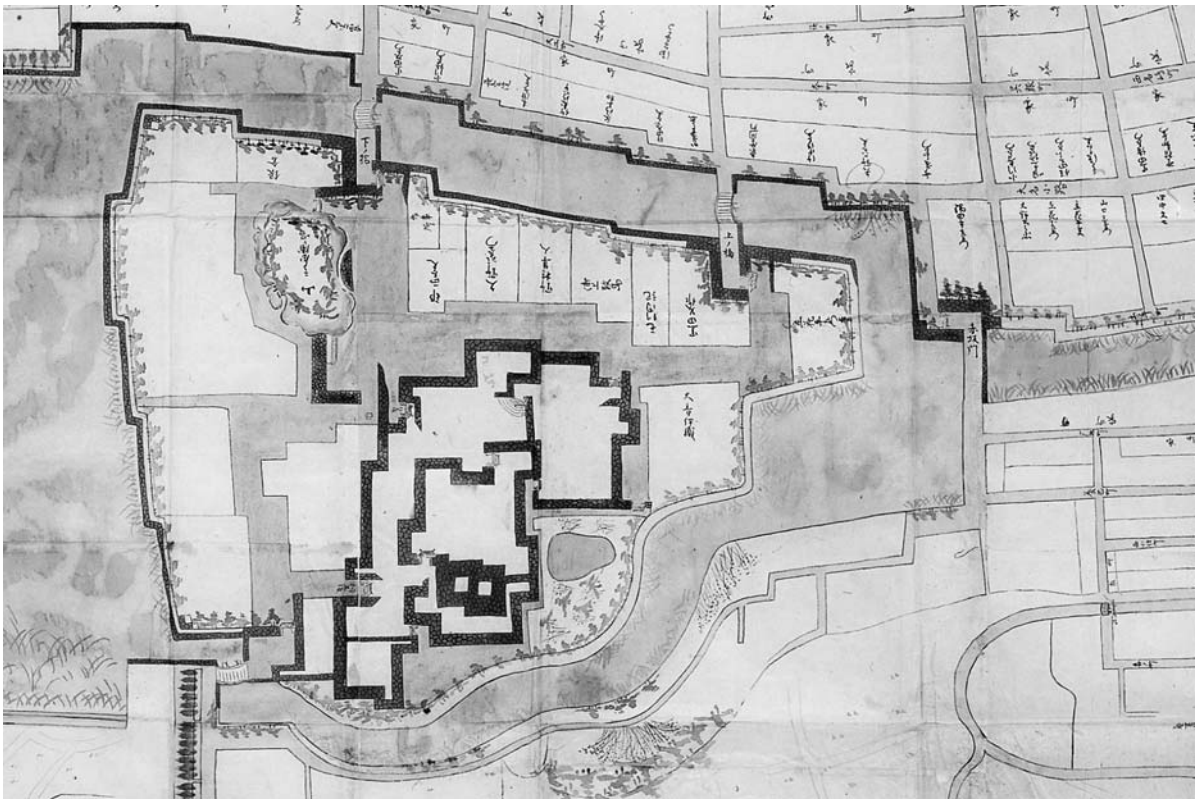
（１）福博惣絵図（福岡市博物館所蔵　黒田家資料129）



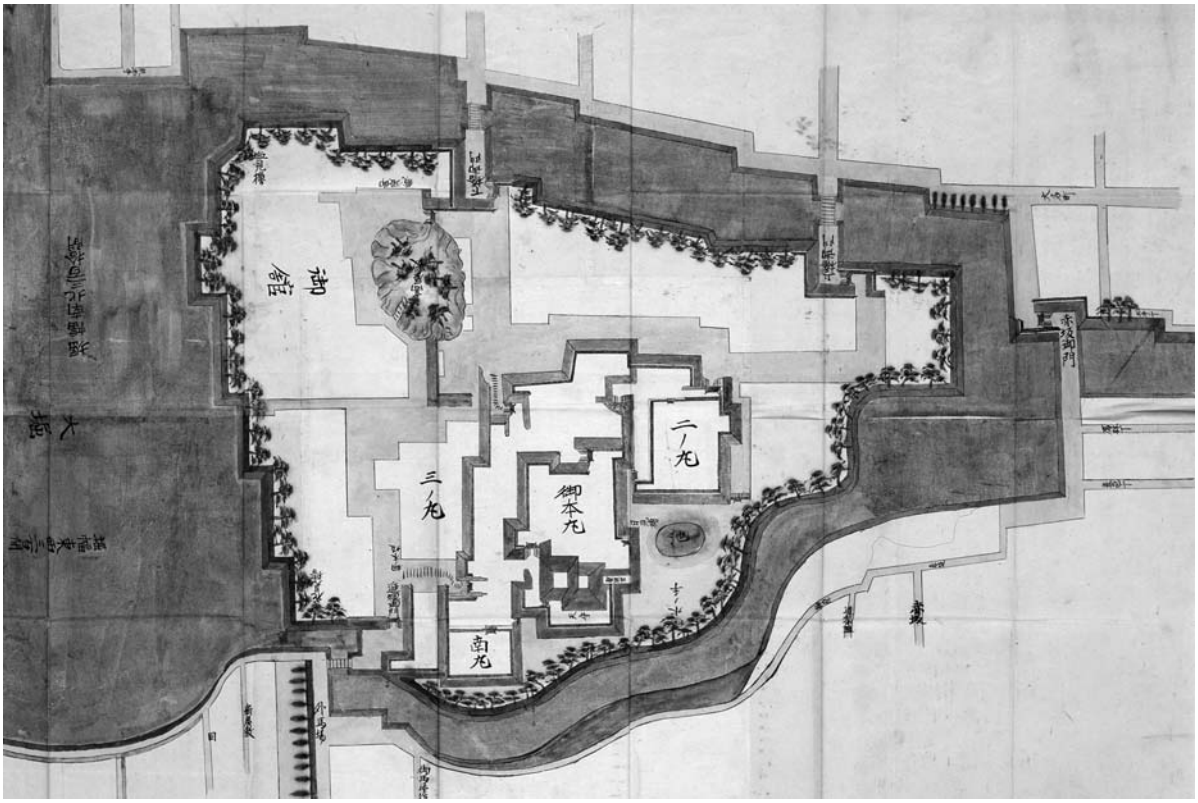
（１）部分



（２）福岡城古図（福岡市博物館所蔵　藤井家資料527）



（３）筑前国福岡城周辺絵図（福岡市博物館所蔵　平成13年度博物館購入資料）



（４）御本丸惣図（福岡市博物館所蔵　鶴久二郎資料２）

と大きく異なるのは内堀南側部分の描き方で、（１）ではこの部分を直線的に描いているが、（２）は曲線的に描いている。堀外側から見たイメージを表現したような描き方である。現在の状況と比べた場合、明らかに（１）のほうが正確である。

内堀外側の法面は（１）と同様に北側と東側は石垣を描き、南側は堀沿いの道路際まで石垣を描いていて、搦手門との間は土坡であったとみられる。（１）で描かれていなかった内堀内側は全周石垣を描いている。肥前堀についても（１）と同様、赤坂門より東側に石垣は描かれていない。

（３）筑前国福岡城周辺絵図（天明～寛政年間に作成か。平成13年度博物館購入資料）（p.16下）

絵図の作成年代については、上ノ橋を出た正面に「東学問書」（藩校修猷館）が記載されていることおよび、掲載範囲外に描かれている荒戸山東側の防波堤の形状から、天明４年以降、寛政年間以前と推定できる。描かれた城郭線の形状は（２）に近いが、東西方向に寸詰まりなことや、城西側の石垣隅角の数が２つ足りないなど、（２）のような図面をもとにさらにデフォルメしたような描写を行っており、正確さにはほど遠い。しかし、堀の水面にヨシやアシの様な草を描き、土坡部分にも草を描くなど、細部については恐らく当時の状況を描写していると考えられる。

堀の法面は内堀北側では石垣が描かれているものの、内堀東側は赤坂門よりも南側に石垣は描かれていない。今回の調査地点も石垣が描かれていない部分に当たる。これが、単なる書き漏れなのか、それとも石垣の表面が埋まって土坡状態だったのかは検討の余地が残る。

（４）御本丸惣図（元治元年写　鶴久二郎資料２）（p.17上）

城郭線全体の形状は（３）（４）に近いが、城西側の隅角の数を正確に記載しているなど、（４）よりも形状には正確さがみられる。とはいえ城郭全体の形状の正確性は（１）には及ばず、恐らく

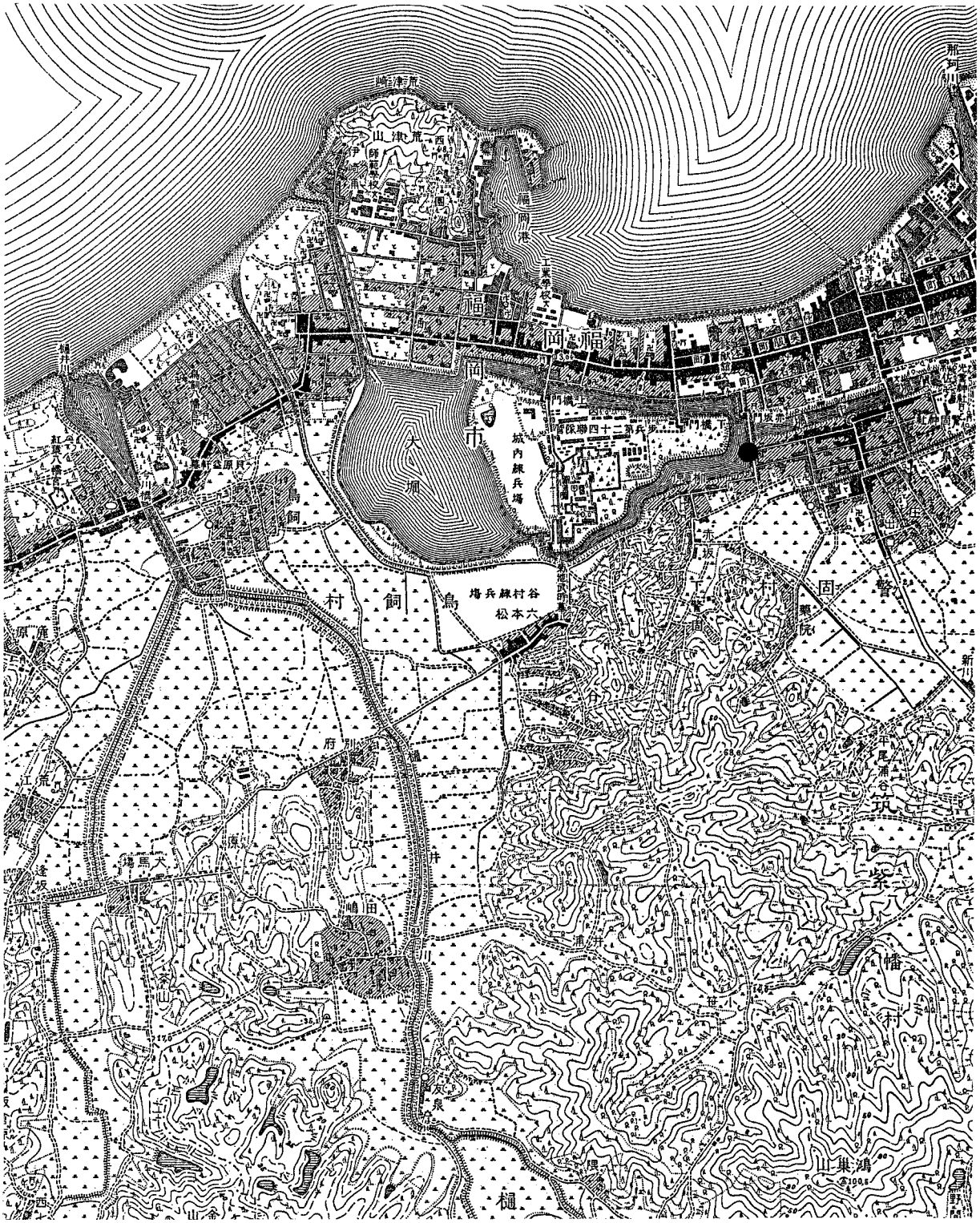


Fig. 6　明治時代の福岡城周辺地形図（1 /25,000）

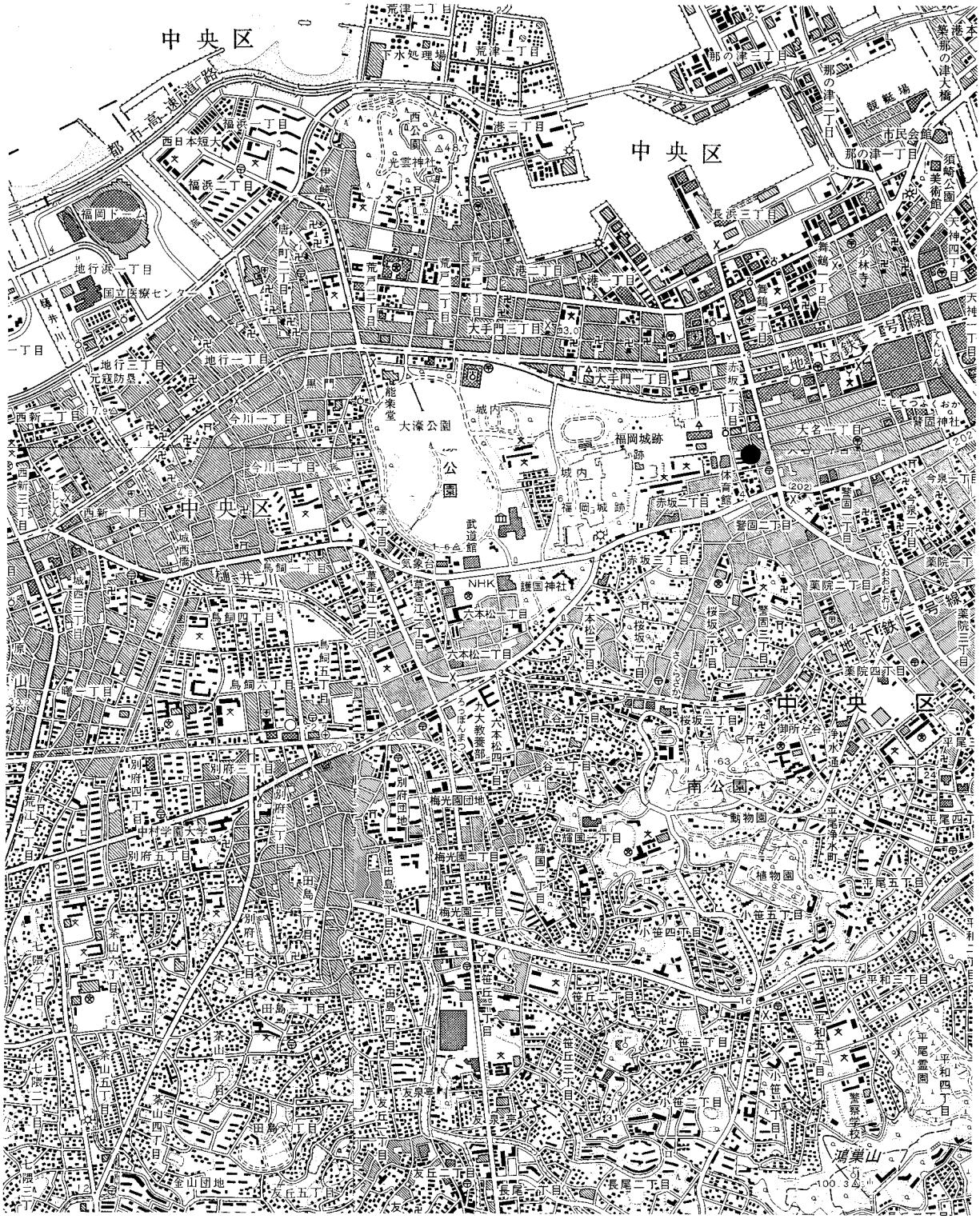


Fig. 7　現在の福岡城周辺地形図（1 /25,000）

（3）（4）等の元となった原本をもととした写本に細かい表現を加えたものとみられる。

石垣の描写は、前述の（1）～（4）とは異なり、石垣の目を描かず、灰色の彩色のみで表現しており、土坡部分は緑色で表している。土坡部分は内堀南側外側と肥前堀法面にみられ、内堀北側と東側は石垣が築かれている。また内堀南側は東半分の長い範囲にわたって灰色の部分がみられ、石垣がそれ以前よりも延長されているようにもみられる。内堀内側法面も全周にわたり灰色で彩色され、石垣が全周に巡っていたとみられる。

以上、絵図の検討から次のような事が言える。

まず、今回調査した地点に関しては、少なくとも江戸時代中期以降には石垣が築かれていることが確認でき、今回調査した石垣はこれに該当するものと考えられる。したがって、石垣の時期は多少の補修を受けている可能性はあるものの築城時まで遡る可能性が高い。

同様に内堀南側については堀に沿った道路際部分まで石垣が遺存している可能性が高い。また堀の範囲、石垣の位置については絵図を見る限り、従来考えられていた中央体育館・中央市民センター南側の道路よりもさらに30mほど南に広がる可能性が高い。その部分より西側は、江戸時代後半以降に石垣を新たに築いている可能性がある。

明治以降の現地の変遷――堀はいつ埋まったか？――

「いやー、懐かしいですね。僕が子供の頃はまだここが沼地みたいな状況で、それを戦時中に埋め立てたんですよ」

そう仰ったのは、調査中に偶然隣の道路を通りかかられた渡辺正気先生である。この一言で、実は標記の疑問についての答えは出尽くしている。少なくとも堀は戦前までは池や沼状に帯水していた状況であった。明治期の地図にはほぼ旧況を保つ内堀が記録されており、堀の中から出土した近代の遺物もこの状況を反映している。

また戦後すぐの1947年に米軍が撮影した航空写真には内堀南側の部分が更地に近い形で写っている。戦時中に埋め立てられて、利用する間もなく敗戦を迎えた様相を示している。しかし同写真中には内堀東側部分に建物の痕跡が写っており、市街地中心部に近い内堀東側部分については内堀南側よりも先行して埋め立てが行われたともみられる。いずれにしても、昭和初期までは堀は近世の状況を残していたと考えられる。当時、堀の向こうに見えたであろう福岡城はどのような姿で市民に写ったのだろうか。

付篇　福岡城内堀石垣の石材

唐木田　芳文

まえがき

2005年５月９・10日の２日間にわたって石垣の発掘現場を調査した。調査では、あらかじめ準備された写真を頼りに、石垣石材１箇ごとに肉眼で鑑定した。岩石の種類はおもに礫岩、玄武岩、深成岩の３種類で、すべて博多湾岸域に分布するものである。とくに玄武岩は博多湾南側の内陸部には露出しない。したがって、石材は博多湾岸域から採取されたと考えられる。しかし、すでに役目を終えた「元寇防塁」の石塁から石材を搬出して２次的に再利用した可能性も大いに考えられる。

石垣石材の岩石

すきまに詰められた小石を除くと、石垣石材には次の８種類が識別された。石材の大きさは、正面からみた長さにして20～120cm ほどである（図１）。

堆積岩

a）中粒砂岩：アーコーズ質

b）細礫礫岩：礫径２mm 前後の角礫をふくむ（写真３）

c）中礫礫岩：礫径10mm 前後以下のもの（写真６）と、礫径約３cm の円礫を多くふくむもの（写真７）とがある。またときに、礫の少ない部分や砂岩をともなうものもみられる。

玄武岩

d）単斜輝石かんらん石玄武岩：径１mm 以下の、丸みをおびた斑晶（かんらん石、輝石など）が散在し、柱状斑晶（角閃石）はみとめられない。

e）単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩：長さ５ mm 以下の柱状角閃石斑晶が、丸みのある斑晶とともに、灰色の石基中に散在する（写真２）。柱状角閃石がわずかにみとめられるもの（写真８）もこのグループにふくめた。d）・e）はともに板状節理を示す。

深成岩

f）細粒石英閃緑岩：斜長石と角閃石（長さ１cm 以下の柱状）からなる斑れい岩質な部分（径約８cm）を内部にふくむ（写真４）。

g）中粒トーナル岩～石英閃緑岩：塊状で、長石は淡紫色を呈し、暗色包有岩をふくむ（写真５）。

h）中～粗粒花崗閃緑岩：不明瞭な流理構造を示すものと、塊状のもの（写真１）がみられる。

石材種の構成比

発掘された石垣は半分以上が崩壊しているので、本来の石材種構成比は正確にはわからないが、現存する石垣における構成比は表１のようである。玄武岩が３分の２、礫岩が約３分の１を占め、深成岩はまれである。

石垣石材の産地

石垣を構成する上記３種類の岩石はすべて、博多湾岸域に露出する。この地域に分布する岩石は、後期古生代の三郡変成岩、後期白亜紀の深成岩（おもに花崗岩類）、古第三紀の、石炭層をふくむ堆積岩（夾炭層）および新第三紀のアルカリ玄武岩である。

堆積岩

福岡周辺には、福岡炭田・粕屋炭田を構成する古第三紀夾炭層が分布する。博多湾岸域では、能古島、小戸公園～愛宕浜、西公園、名島、香椎～新宮に露出する。それらのうち、西公園（野間層）、名島（名島層）、香椎から新宮（宇美層・高田層）のものは、礫岩を比較的多くふくむ。出土石垣の礫岩は、それらのいずれかの海岸域から採取されたと推測されるが、層の特定はむずかしい。

玄武岩

北西部九州・北部九州から山陰地方にかけての日本海沿岸域には、新第三紀アルカリ玄武岩が点在する。その一部が、博多湾岸域では福岡市の玄界島、糸島半島の毘沙門山と今山、そして能古島に分布している。これらは、構成鉱物の種類から次の４岩型に分けられる：①かんらん石玄武岩、②単斜輝石かんらん石玄武岩、③かんらん石角閃石玄武岩、④単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩。角閃石は、すべてオパサイト（おもに微粒の鉄鉱からなる集合体）に変質しており、角閃石そのものとしては出現しない。

これらの岩型①～④のうち、②が能古島、毘沙門山、今山に、③が玄界島に、④が能古島に分布するが、①は博多湾岸域にはみられない。上述のように、石垣の玄武岩は②と④に相当するので、両玄武岩類がともに存在する能古島がもっとも有望な採取地であると判断される。

深成岩

博多湾岸域にみられる後期白亜紀の花崗岩類は、ペグマタイトをともなう長垂付近の早良花崗岩、糸島半島北部の小田浜海岸域から能古島北部につづく北崎トーナル岩、そして糸島半島北端部の宮浦から志賀島に広がる志賀島花崗閃緑岩である。

出土した石垣の深成岩類のうち、g）の紫っぽい長石をふくむトーナル岩～花崗閃緑岩は北崎トーナル岩に、h）は志賀島花崗閃緑岩本体を構成する岩石に相当する。f）は志賀島花崗閃緑岩中によくともなわれる暗色包有岩に酷似している。これら３者は宮浦から小田浜海岸にかけてみられる。

元寇防塁

1274年の蒙古襲来（文永の役）後の1276年に、再度の来襲に備えて今津から香椎まで20km にわたって「元寇防塁」が築かれた。その石塁の石材は堆積岩（礫岩・砂岩）、玄武岩、花崗岩、変成岩と多種に及ぶが、いずれも博多湾沿岸域に分布するものばかりのようにみられる。

たとえば、西南学院大学１号館の建設中に出土した「元寇防塁」は、大学によって移設復元され、１号館１階ライトコートに展示されている。1999年11月の発掘調査のさいに実見した石塁の岩石は、68個中、蛇紋岩57%、角閃岩38%、玄武岩５%であった。こうした蛇紋岩と変成岩からなり、玄武岩をともなうような地質の所は、ちょうど今津半島に相当する。石材はそこから運ばれたものだろう。ほかの「元寇防塁」遺跡でも、その近くの沿岸域に露出する岩石を石塁構築に利用した例がみとめられている。

このように石材種という点からみれば、福岡城中堀の石垣築造のさいに、「元寇防塁」の石材の一部を補完的に再利用した可能性は大いに考えられる。

まとめ

今回調査した福岡城内堀の石垣を構成する石材は岩石学的に次の８種類に分類される。

①堆積岩：a）中粒砂岩、b）細礫礫岩、c）中礫礫岩

②玄武岩：d）単斜輝石かんらん石玄武岩、e）単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩

③深成岩：f）細粒石英閃緑岩、g）中粒トーナル岩～石英閃緑岩、h）中～粗粒花崗閃緑岩

福岡城中堀の石垣石材の写真

注　写真中のスケールの数字間隔は短いものが１ cm、長いものは１ inch。

写真１　中～粗粒花崗閃緑岩：塊状の志賀島花崗閃緑岩に相当する。

写真２　単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩：板状節理面上に散財する、柱状（角閃石）や丸みをもった斑晶（かんらん石など）がみえる。

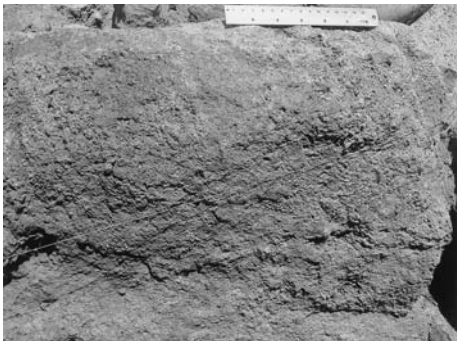


写真３　細礫礫岩：径２ mm 前後の、比較的角ばった礫をふくむ。

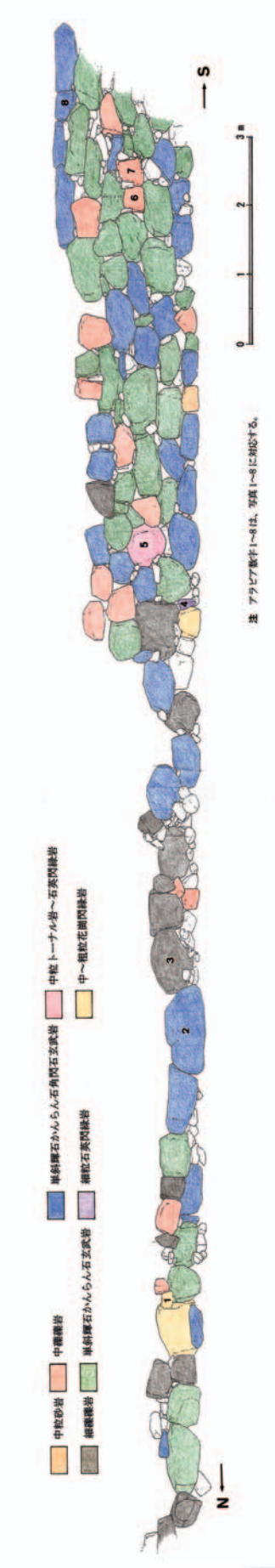
写真４　細粒石英閃緑岩：志賀島花崗閃緑岩にともなう暗色包有岩の一種。内部に、長さ１ cm 以下の柱状角閃岩をふくむ斑れい岩がみえる。

写真５　中粒トーナル岩～石英閃緑岩：紫みをおびた長石を特徴的にふくむ北崎トーナル岩に相当する。

写真６　中礫礫岩：礫径の小さいほうの部類。

写真７　中礫礫岩：礫径の大きいほうの部類。

写真８　単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩：明瞭な柱状斑晶（角閃石）はあまりみとめられない。



これらの原産地はすべて、博多湾岸域にみられる。①は博多湾南東部の西公園、名島、香椎～新宮の沿岸域、②は能古島、③は糸島半島の宮浦～小田浜の沿岸域から採取されたものと推測される。なお、博多湾岸域の岩石で構築されたとみられる「元寇防塁」の石材を再利用した可能性も考慮すべきであろう。

表１　石垣石材の岩石と数・比率

岩石 ＼ 数・比率	数	比率（%）
堆積岩	31	29.0
中粒砂岩	1	0.9
細礫礫岩	14	13.1
中礫礫岩	16	15.0
玄武岩	71	66.4
単斜輝石かんらん石玄武岩	38	35.51
単斜輝石かんらん石角閃石玄武岩	33	30.84
深成岩	5	4.6
細粒石英閃緑岩	1	0.9
中粒トーナル岩～花崗閃緑岩	1	0.9
中～粗粒花崗閃緑岩	3	2.8
合計	107	100.0

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふくおかじょうあと
書　　名	福岡城跡
副 書 名	第53次調査報告
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第960集
編 著 者 名	大塚紀宜
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	810－8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８－１
発 行 年 月 日	平成19年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
ふくおかじょうあと 福岡城跡	福岡市中央区赤坂１丁目55	40130	00193	33°35’8”	130°23’26”	2005.04.04 ～ 2005.05.20	156.0㎡

調査原因	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
共同住宅建築	城郭	近世	内堀石垣	近世陶磁器・近代陶磁器・ガラス瓶・貨幣・瓦	

要約	調査の結果、既存の道路際に沿って南北方向に延びる石垣を検出した。石垣の遺存状態は、北側で腰石から１～２段程遺存し、南側では基底面から1.8m の高さで遺存し、本来の形状を残しているものと考えられる。堀基底部は礫混じり灰色粗砂層（川砂）。堀底部、壁面からは常時水が湧いている。堀覆土下部は黒色粘質土で近代の遺物が混じる。堀覆土上部は青灰色粘土と砂層の互層で流れのある状態で自然堆積する。石垣は南北方向に一直線に並び、石垣面の傾斜は直立に近い。基段の石は幅１ｍ以上で、上部の石よりも一回り大きな石を使用し、２段目以上の石は幅60cm 程度の石を積み上げている。鏨痕などの整形を行った痕跡をもつ石はみられず、荒割りした石材をそのまま野面積みしている。石垣基底部には胴木等は検出されない。墓石など他の石製品を転用して使用したものはない。石材材質は、玄武岩、礫岩、花崗岩など、素人目にみてもかなり幅がある。裏込め石は20～30cm の角礫・円礫を詰めている。裏込め石は石垣面から１ｍ以上奥まで存在し、さらに道路側に拡がるとみられる。出土遺物は、染付やガラス瓶、陶器が主体で、大半が近代～現代の遺物である。天保通宝、１銭銅貨（明治16年銘）も出土している。 石垣の遺存状態は比較的良好で、築造当時の様相を残している部分もある。城本丸の石垣と比較すると、石の積み方は粗い。

福岡城跡

― 第53次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第960集

2007年（平成19年）３月30日

発　行　福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　㈱富士印刷社

福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６－45